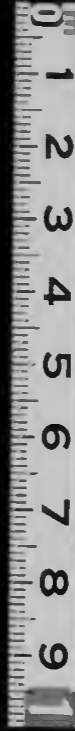


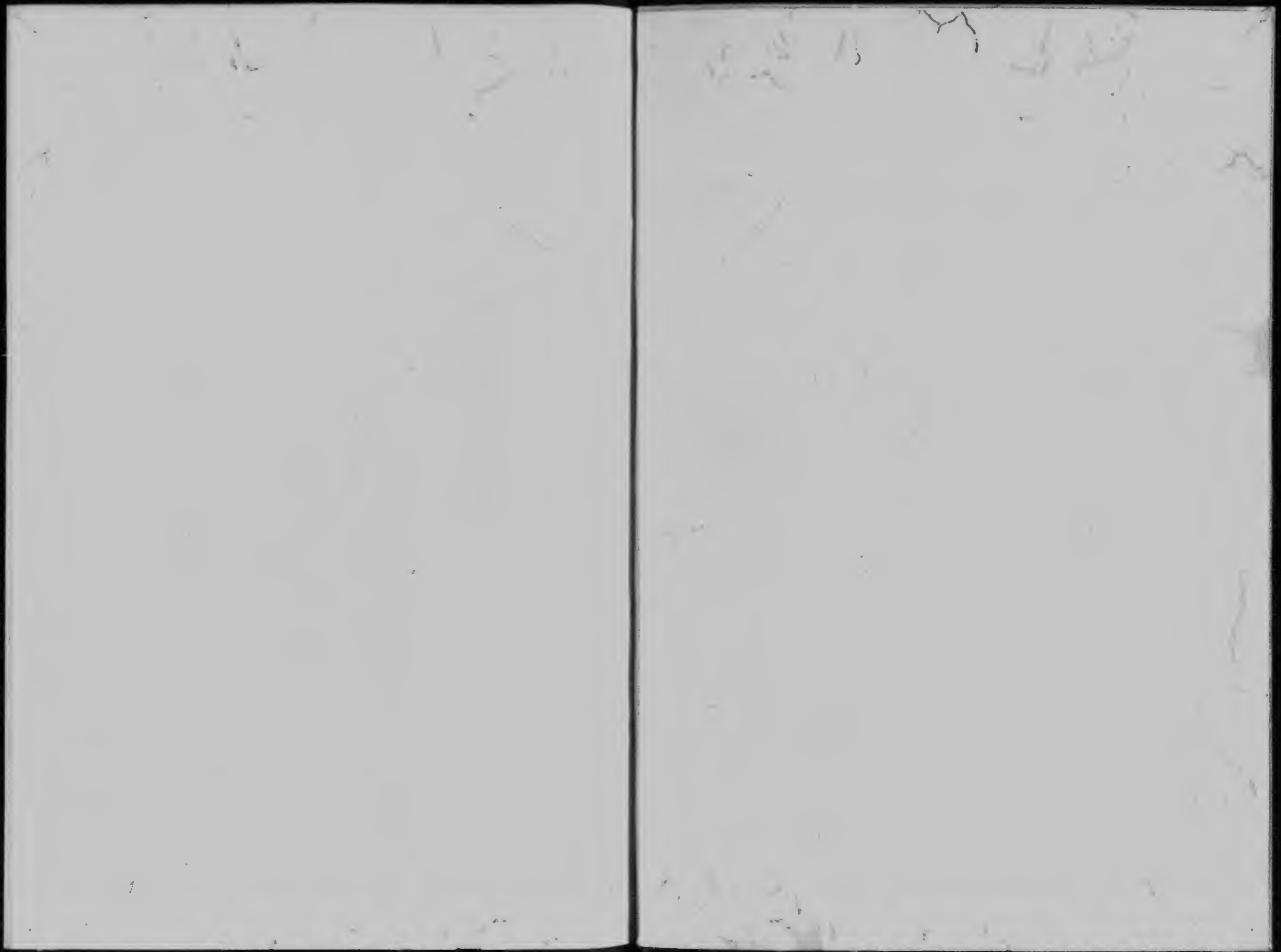
清少納言集

一



内閣文庫	
番號	和32569
冊數	394 (104)
函號	152 121

内閣文庫	
五二函	三三九
一	二冊
二架	九號
	和書類



浄土性組二番組

寛永十酉年七月廿二日七番組
慶安三寅年九月二日六番組と成
慶安四卯年六月 六番組と成
享保九辰年三月廿三日三番組と成
元文二巳年閏十月廿二日二番組と成

寛永十酉年七月廿六日

寺奉改葬後三箇

御出性組松平信直等組

御小性組中根借七市組 仁賀保内託藏次

延宝六己年四月拜入太左源右衛門組

同年六月八日死七中三某

寛永十酉年七月廿六日

赤小性組中根傳七郎組

相模守忠降六男

赤小性組中根傳七郎組

言々 大工傳刑部忠高

後書名

政平書

寛永十酉年七月廿六日

思召出立ししに御下出えし

新忠甲斐國少て言ふに揚子

寛永十酉年七月廿六日

寛永十酉年七月廿六日

白書しし

寛永十酉年九月廿三日

寛永十九年十月廿一日
白紙

寛永十九年十月廿一日

白紙

中山性組三浦甚蔵

中山性組中根伝七而組三浦甚蔵

寛永十九年十月廿一日
白紙
とて者刺と令書して物取返事と
一に性組ハ福とさせり小事とせさせ
給ハそとてゆ

寛永十九年十月廿一日
白紙
橋乃舟入取郵石種と造りて
性組と令書し同九月小至りて

山

ありて美令改時服之と揚。

正徳元申年三月同日島原(國)海防

之と揚。の作ありて明の百二年四月

揚。

慶長元子年三月三刻風来事と候也

らうと海用と云々。

明曆元申年三月細目強河國産塩

山乃道と造らうと海用と云々。

之事候らう三月三日美令改時服之揚。

明曆之百二年四月三日傳 奏舞和田倉

乃郎の高倉部と造らうと海用と

令をうと明乃申年九月小初成之後

美令改時服之と揚。
百治二亥年三月廿一日
百治二亥年三月廿一日

日年三月廿一日

百治二亥年二月廿一日

有馬松平の願ふ(國)海防

之と揚。の作あり。三月廿一日

改之揚。三月廿一日

寛文元申年二月廿一日

之と揚。の作あり。七月廿一日

改之揚。明乃申年二月廿一日

相陽寺

寛文七年十月二日大徳寺
仲と合掌しきし十月六日
黄令と陽のあきり月
五日ゆき相陽寺

寛文七年十月二日死すの家

寛永十酉年七月五日

高橋之膳云次郎

沖中組之南志保也組

沖中組中根信七郎組

吉名 三花甲斐守権吉

正保二酉年九月十九日死二十八歳

寛永十酉年七月廿六日

水野之丞と補吉勝惣所

御書院番

御小姓組中根傳七郎組 七喜若 水野之丞御勝安

辛號月日石知群入

明暦元庚申年二月廿日先組中根組

御井元澤守組口内番

寛永十三年七月五日

想々忠貞熱心

御書院番之御侍等組

御中世組中根傳七郎組 千三右 松平長之而忠高

平保之長年而候の御所と候

御所と候御所と候

慶安二年二月十日豊後守内

御所と候御所と候

寛文十二年七月十日御先施取

日年三月十八日御所と候御所と候

御所と候御所と候御所と候

天智少将の如く六部の内く福を承
多言信より之に

天和元年四月五日並法加恩吉名
元来吉名

同年九月十日法加恩吉名

堀田孫右衛門俊親信作を傳へて

新恩の法書り楊上野國邑樂郡

叔母村下野妻藤那山形村之吉名

天和二年三月十日楊多吉名列す

貞享二年三月十日致仕を料三吉名

楊多吉名とて自休より

之條を申年二月廿日死

寛永十周年七月廿日

寛永年中記

御中世組中根信七郎組 吉名 松平公直廣安

石川助信房

御番印人

廣安御家號之稱す事元

御商家乃廣流母松平紀伊守家信

如取道元御家子屬之松平公直

稱し之

寛永十九年九月廿九日死

寛永十周年七月廿日

寛永三寅年六月廿日分知千石
寛永九申年兄弟家名後高如元

日根野左末高次中書後
清書印之入

中世組中根傳七郎組 千石 日根野中助高真

高去八日根野左末高次中書後
之先分地千石之石見言清書
子孫之石名之傳七郎組
家名之傳七郎組高去八日根野
嗣一先之清書印之破也
此傳書之石名之傳七郎組

清書印

之后西條乃

御宮は後醍醐天皇御時之役と誓先
万治二年九月御智虎の口乃御門
御成橋流り等邊河の成造り等々
奉納と命せしむる内病りか可て

万治二年十一月九日死

寛永十酉年七月廿一日

中人外神保之帝多番長之御方

御中世祖中根信七而祖 三喜信 神保清之丞長賢

後多知三喜信

千之石高末三喜信と云々

万治元年二月廿八日多知三喜信是迄

の三喜信ハソノ一奉々

延宝二年三月群入三田佑後守組

延宝四年四月廿二日沙事院前

三枝徳政守組入

寛永十一年

寛永八年辛酉月吉日

中山依布守信吉之男

清書印之人

佛光性組中根大陽守組

言儀中山主馬信久

後主馬守
隠法師

寛永元年五月七日

國許之腰相以の印中して

佛使と金堂をて明の

まゝ信吉ておあま

楊の世目己の別事

相本身よまゝく

とて日月の御く事

寛文六年二月辛酉日由水世祖与次

同年三月三日由加急之旨依凡百依

同年四月廿八日有在急之旨依之旨

延宝七年六月廿七日由水世祖

天和元年七月九日盗御政之事

乃其作防

同年十二月廿日盗御政之事在急

之旨依之旨依之旨依之旨依

天和元年四月廿日由加急之旨依凡百依

同年十月廿日由加急之旨依凡百依

是之旨依之旨依之旨依之旨依

治之凡百依

同年十二月廿七日由加急之旨依凡百依

同年三月廿日由加急之旨依凡百依

同年七月廿日由加急之旨依凡百依

同年九月廿日由加急之旨依凡百依

同年七月九日由加急之旨依凡百依

同年

同年七月廿日由加急之旨依凡百依

寛永十三年六月七日

河清氷河和日合勝勝吉想
御小姓組仙石園橋守組 三原 細井合之而勝武

後三之宮守右 後合勝

寛永十六年庚申三月三日

寛永十六年庚申三月三日

子石是之方之百儀か下奉

山保二酉年六月八日

同日水主同心守右人上願多

慶安三年六月廿日死早之衆

寛永十三年六月十日

河津姓組仙石因情守組 三言儀 市島子左衛門守義

後七言石

寛永十三年三月 寛永三言儀を賜ふ

慶安二年四月日先の法儀に随ひ
寛文二年 月 日 跡目 十言石
是との三言儀返しを

寛文四年七月十日 因東のうち
巡見使と命を 是日 月 十日 十言石

上野常陸巡之きよし傳ありし其言
中服美全極と賜りて巡視事年々
つらし物

寛文六年二月十八日同身

同日沙加恩之旨儀ありし

天和元年二月廿三日嘗侍にあられて

此後と奉集てれり一氣々々のも

堀田傳中より後相臣傳つて此書後

入太保主事官以廻り月廿九日免され

元禄四年七月廿日致仕して終

つらし一書用て改

元禄十五年八月十八日死す

寛永十二年九月

由活地助多之重茂

清小性組仙石大和守組 三景儀 玉虫助高清茂

寛永十六年八月廿三日

延宝四年八月廿日死

寛永十六卯年七月十六日

寛永四年三月廿三日

御小姓組仙石之和守組 子右 松平新十郎忠行

松平忠房の忠隆也

清書印人

改右衛門

慶安元年四月日光の清信也

寛文元年八月朔日移入北条右近左又組

元禄六年六月朔日死

寛永十六卯年七月十六日

西郡政吉書

寛永十六卯年七月 五日

元路河原

清吉印

清小性組仙石大和守組

子石

大井新屋政景

慶安二丑年十二月十日

兼意元辰年九月八日

寛永十七年

寛永十二年 文陽居柳屋名不

赤井洋平 河内 三浦の妻

赤井卯の人

河内住組仙石名和守組

名 赤井洋平 河内 三浦

寛文三年 入滝川長門守組

延宝二年 年八月三日 赤井院 妻 卯 友

名 和守組 入

寛承八年己未四月十日

寛承十七年辛未月日

志利帝御所

少輔信酒并院住持

中世祖仙石之和守

章君 公之志利次

山徳四亥年九月五日

同辛未布衣

慶長元年辛未月日

明曆三年辛未十月十九日

神國新編

吉養川

寛承八年己未

大和國平群郡額田之村之寺元安寺古本
同年二月廿日沙眼所加恩所也之條
おあ〜〜〜と意以之條〜

寛文七年二月廿日

同年十月九日沙眼所加恩所也之條

寛文七年二月廿日沙眼所也之條

同年十月廿日沙眼所也之條

寛文七年二月廿日沙眼所也之條

同年十月廿日沙眼所也之條

寛文九年二月廿日沙眼所也之條

同年十月廿日沙眼所也之條

寛文九年二月廿日沙眼所也之條

二月廿日沙眼所也之條

寛文九年二月廿日沙眼所也之條

同年十月廿日沙眼所也之條

同日町奉行沙眼所也之條

寛文九年二月廿日沙眼所也之條

同年十月廿日沙眼所也之條

寛文九年二月廿日沙眼所也之條

同年十月廿日沙眼所也之條

寛文九年二月廿日沙眼所也之條

同年十月廿日沙眼所也之條

寛文九年二月廿日沙眼所也之條

同年十月廿日沙眼所也之條

寛文九年二月廿日沙眼所也之條

同年十月廿日沙眼所也之條

寛文九年二月廿日沙眼所也之條

志度沙弘明ありきより一級乃板倉
 内膳宗重頼の方(海)のふり作て重頼
 より子事と尊しにたより事静澄らん
 事と心(心)とこといふも信者(心)
 志状とをり事奉り威の志量
 ゆつたと作かして法後と在る(心)
 さうて居つて作とて信者も身(心)
 らも(心)より(心)一二年の(心)
 寛文十二年七月廿四日(心)
 八月十七日(心)出雲信濃川
 長門(心)入
 寛文十二年七月廿六日(心)

寛永十八年六月六日

御小姓組仙石園情守組二名 福生七郎左衛門(心)

西徳二百年月日(心)

寛文三年六月廿四日

同日(心) 寛文三年六月二日(心)

まゝのまゝに作りつて法眼を合
 松と揚子宿の事か、法眼
 よりその日の午に別におこす
 難波の朝のしきこそ前巡視して
 二月六日付けの志し、十九日法眼は
 出く巡視の事とよびをよむ
 同年三月十三日長崎奉行
 寛文六年二月七日長崎にて死
 四十一歳

寛文十九年

福全流多合松年後法守康盛熱風
 清小姓組仙石園情守組 三音依 松平高直而康之
 後以重石

康之の先考

長親君乃法信男三高帝親直の流もく
 祖父後法守康親三列福全由まぐ
 死し父康盛より徳園にて子重石乃
 地と揚子宿合の列は入部二門の列もま
 康盛寛永八年十月西條にて
 台徳院殿大炊院利勝組長と記せり

主猪乃徳武在良上野好義跡う治り
此下と記作方又功業を追て治夜
三有べき作と為しうそ明の年
台徳院敬其死治ひしめんそ事しに
乃た親盛ハ生治事合流よていひ
乃るのそそ康久跡治信う治夜
列せし記

寛文十三年三月三日濟公名是と乃
三帝後返しちりそ言九而康末三言是と
分川

延宝四年十月廿三日御先地
同年三月廿三日布衣志と記せし記

天和二年二月廿日死

寛永二十二年六月廿六日

御先方政布絶海番重重御成

御小世組仙石大和守組 三右衛門布絶新設御重頼

後方三右衛門 後海番重

其後御成来之御儀上備

慶安元年三月 月日御目五十二名迄

迄乃三右衛門之御奉

万治元年三月廿五日御先方迄

曰奉国三月晦日布番重之御成

天和二年三月廿五日並治如前五百名

凡五百二十名

元禄元年春二月 日祥多合列寸
元禄三年七月 日致仕と稱言儀
と稱言誓あらずと獨言存と云
元禄八年四月二日死七十年

寛永二十六年六月廿一日

法務院取上系自信書紙

河小姓組仙石大和守組 言儀 石谷重定武清
法長門守

西保二箇年三月年俸三言儀と揚ふ
崇安元子年四月日老へ借させりふ
法信日隠し

万治元年三月廿一日 言儀 法徒取
同日法如急三言儀元六言儀
万治二年春分月廿日言儀あり言儀在
元の言儀ハ父去入の隠在料と揚ふ

寛文二年正月日迄の法儀は
ありしに

寛文六年六月御宗廟と宇治
よりおろせられた所を以て甲別
谷村はまうりてを秋谷村へ
移してある也。

寛文十一年三月廿六日法儀

延宝元年三月廿九日御宗廟

ありしに

延宝元年三月十九日

禁中へ附せられた所を以て御宗廟
千石総計二万石有るに月九日

内裏をよせられた所を以て御宗廟と
法眼法より其令文及御宗廟二羽威と備へ
日迄の事とせられた所を以て御宗廟と
七月御宗廟の御宗廟を以て御宗廟と
在系七ヶ年及び御宗廟の御宗廟と
御宗廟の御宗廟とせられた所を以て
御宗廟とせられた所を以て御宗廟と
御宗廟とせられた所を以て御宗廟と
御宗廟とせられた所を以て御宗廟と

延宝元年四月御宗廟の御宗廟ハ
在系の御宗廟とせられた所を以て御宗廟と
とせられた所を以て御宗廟とせられた所を以て御宗廟と
地を以て御宗廟とせられた所を以て御宗廟と

得りて近江國と収りし。
元禄十六年七月十二日致仕右と改て
武清と云
宝永七年三月四日死す此年

正保元年六月十六日

御中世組仙石大和守組

御中世奉引牧中御部南常春子

三宮儀牧野教馬成高

後五三石

後攝津守
大監物

其後高家三宮儀と稱す

慶安元年日光の法住に在り

寛文二宮年六月六日御中世組三石

是より乃三宮儀に父老と号す其後

寛文十二年六月十日御使番

日永三月廿八日右を名とせり

延宝元年六月三日大和守

仰りて命せしむ八月廿日涉野若菜
松と湯の間の管年二月廿日湯
好待寺

延宝三宮年七月九日

林重政附世目志如恩名石凡二子二百石

同年八月廿日新恩の法書ありと

少下三列漢井郡南村之河村

ありとわさる

同年三月二日

内よりありしは新恩の仰りて揚律書と改

延宝四年年四月廿八日云々ありて

淨福

延宝五年二月九日涉野若菜全
付帳三列漢と揚

元和元年二月廿日涉野若菜全

中書信より入るき三白但馬守組入

其後三列の家保所用をよりて

好りまやいしとて中野國江國郡

中野村飯山村の内ありと下

元禄九年二月十日麴町の庄跡状

所用をよりて好りまやいしとて

田谷内及田中より多量に保文全と

下

宝永五年八月廿日致仕松屋とありて

孫少子

正保二年三月廿五日卒

正保二年三月廿五日

沖津組 田代清直 音信 母 友 高 清 利 則

沖津青母友高清利公

後二音信

致 友 友

正保元年三月 日 海月二音信

正保元年三月 日 海月二音信

正保元年三月 日 海月二音信

正保二年三月 日 海月二音信

正保七年三月 日 海月二音信

西保二周年六月廿九日

寛永七年六月廿九日

内記古蹟書院
清善如人

清小性祖葉田後後守道 音石園部之云云

改
信守
信守
年人云

延宝六年六月十三日

新院所附

日年六月三日法加恩古音石道江國
栗太郎のうらまを法了凡音石を後

上系

院系一叙當時後後守と改

自享二十五年二月廿二日

新院沙所崩きししうえは岸より

りして畠合を列す

元禄十丑年二月廿二日 幸平八景

西保四書年三月廿五日

西保元申年三月 日 晴

由緒九并之書正十熱風

由緒ありし人

河小姓組葉内後津守組 三喜右 小堀三高 斎藤可

その後西保の橋下乃石壁と後を

河川とつとめ

華意二十五年六月 日 雜子橋 後電

橋の沖保と津ありし作とありしに

よつてそ事をと替りてを切ありしに

美令三河版三を禱す

年号月日不知移入河川長門守組

延宝元五年 月 日 教化
自寛文元五年八月九日死

心保四年三月廿五日

寛文八年二月 日 知

御中組世田為後守組十三年名海田十帝宗成

政公宗成

寛文元五年三月廿日 列仙卷
悉承以成之 國田守とて 悉承の
作育の明の意 年二月廿日 御中組
組と稱す 九月廿日 御中組

寛文二年三月廿日 御中組

日年三月廿日 御中組

寛文四年二月廿日 御中組

代りて金さきき日月百部服美金女
と揚り六月廿日揚てお湯す

日奉十月廿二日先由園を代りて

命さきき

實交の字奉付月相日踏酒かき松花

初福あき六波瀬分河内國徳時入園

御用さききさきさきの作り九月七日

由服美金女と揚り明の奉奉四月

十音仰りお湯す

宵交九百奉三月十日由園園島

城と立青新左徳治さきき江原由用

と奉さきき日月廿八日由服美金女

由服美金女と揚り四月廿日揚り洋

揚り六月廿日由園園島城と奉さきき

唐之相伝お湯す

日奉六月廿日由園園島城引後

由園美金女と揚り七月相日由服美金女

と揚り八月廿日由人馬の由奉さきき

揚り七月廿日由九月由て七月洋揚す

宵交九百奉三月廿日由園園島

左隣北総北白川街道と巡検さきき

作と奉り明の戌年七月二日秋

園島風快あき巡検と奉り奉に
迎さきき

寛文十三年五月廿六日巡検浦原
美奈村に賊之跡を以て七月廿日
ゆき津湯一九月廿日津原の例に
てききて巡検の由なり

延宝七年七月廿七日先由同奉行
と命せしむ

延宝六年七月廿日給付由同奉行
してききとの作りし月廿日浦原
美奈村に賊之跡を以て七月廿日由て
お備す

天和元年四月廿七日先由同奉行
ゆきと命せしむ

同年六月廿七日先由同奉行
先長廻集を以て八月廿日浦原
同奉行に由て先由同奉行と命せしむ
七月廿日浦原美奈村に賊之跡を以て
明の成年三月廿日由て津湯す

天和二年四月廿一日浦原美奈村上野
國邑津原勝尔堀村同奉行上小
村村下野國津原郡下津原村先由
同奉行と命せしむ

同奉行元年四月廿日浦原美奈村
先由同奉行と命せしむ

慶安元子年八月三日

与六郎公信書所

酒井

酒井性祖禁田新後守祖酒井吉右大草深在龜山公利

万治元子年入酒井紀伊守祖

延宝七年六月廿三日死七十一

慶安元年分付三目

伊予廣敷郡長春寺子

伊予性理書院後守組 三目信守部野金左衛門四親

後守名

其後慶安三目依上條

寛文二年十月十日評定書名是上

三目依上條

寛文五年申稱入澁川長門守組

元禄十五年分付慶安三目依上

東地子部一筋一武別橋西川三郎村

辻村新在村より三目名以下

元禄十三辰年七月七日死享年三十一

慶安二年十二月廿六日

清小性組甚苗後後世也 云云石 御井兼平而勝行

涉部小舎左衛門尉忠成

慶安二年十二月廿一日

上端... 云云... 勝仍... 云云...

延宝七年二月廿七日

天和二年四月廿五日

上野國新田郡中沼山村同色堂那
海老瀬村の之後、凡そ八百石
自享和四年正月十日法光寺に
元禄二年正月 日死す

慶安二年十二月廿六日

沖山住祖第百後信守組 三信 須田 高 高 盛 信

大沼番組頭酒田久信(盛政次男)
兼信元在 年三月廿日慶安二年信守
組

元禄二年三月 入組 年三月廿日

山德元年三月九日死す

盛信の嗣子 三子 高 高 高 高
部 高 高 高 高 高 高 高 高
父 高 高 高 高 高 高 高 高

之類を子にすはるに徳二存年四月五日
本家文酒田之末更盛次が書に
形了あの内いし其末のえり

慶安二年三月五日

御世祖葉田流守組 兼 青山庄元之康
後子名 改言書

御世祖世系祖初之市利改憲凡

慶安二年三月五日
御世祖葉田流守組
兼 青山庄元之康
後子名 改言書
命書に色同月八日九列の多うと巡る
乃き仰々多勢の同月八日法雅堂令好
時版二職と終了三月五日迄法用の
事と申す其日相得也

延宝元五年二月十日大坂御用所
令書しき二月八日御服甚々好し傷
九月九日御てお福す

延宝七年八月十日御使書

同来三月十日御使書

天和二年二月十日御使書
病ひして大坂御用所へ
手代りて令書しき同日御服
甚々好し傷す
病ひありし事

天和二年二月十日御使書

同来八月十日御使書

嗣子の事と申すは
申して其嗣と申すは
意を以て家地を名を
稱重石守と申すは
と申すは御使書
お絶し

慶安三年九月二日

御小姓組並園遊法守明道者名中山勘三郎重範

中山勘三郎重範

御書院若狭守重範

明暦二申年三月八日勘三郎重範
八条家馬術奥後とよきを先代の家
あきとてり小宮守とよきとてり

將軍家(法皇)の事を傳(ま)すこと
作(な)すて法皇の同(な)まを以(も)て作(な)す
か(ら)し御(ご)家(け)に直(ただ)ちて馬(うま)の
の事(こと)を(ま)か(ら)し御(ご)事(こと)の(ま)は

時辰一と揚

明暦二年七月 日清書御免事

同年三月十日 馭封の事 日清書を以て
傳へたりしとて 布衣を乞ふ事

万治二年四月七日 官中より 日清書

様事と争論あり 日清書の事 日清書

所より 日清書の事 日清書

姫路に 死せし事

寛文二年四月廿七日 日清書の事

内々別紙 会郡 備前村の事

元禄六年七月廿二日 死せし事

慶安四年七月

新右衛門 日清書

沖小性 但馬 井原 守徳 三原 本庄 市政 也

法名 法名

善悪 元禄 年 月 日 海月 あり 是 事 の

之 事 候 下 事

寛文元年 正月 廿 日

禁裏院中 選出せし 奉 命 事

九月 三日 日清書 御免 事 日清書

教へ たりし 事 事 候 事

寛文二年 春 事 事 候 事

つらき新造方

内書(近き)二月九日勸修寺本願寺
経廣郷郡を井あつ酒云雅章に以て
長橋乃為よ百きして公に津東安仙
是物計と備

本院法衣と備

仙洞より晒布正甚物包といふき

女院より甚厚乃破管法衣と備

九月廿八日之江ゆて淨福

同幸き

新院の法衣法造言乃より十月廿
のりつ此の衣の八月法造言

養老者下百き公卿深毛益本百首
の奇法甚也と備 且甚也十と備
中一法ひて寛文六年六月
うに帰

寛文六年八月廿八日法造言奉別

延宝七年四月廿八日法造言

法造言と備

六月廿日法造言と備 此乃例分
備とのり十月之に流と明乃
申年二月廿六日切乃分と
わらふしと甚念好法衣と備
天明元年三月廿九日法造言と備

中書省修入太常寺丞事元正
宣永元申年一月日致仕
宣永元申年二月日致仕九年二月

養正二年九月某日

許小性祖酒并承守祖 二名 成瀬家多美今朝

細井全三傳勝若三男
許小性祖内多美守祖

改多美

百居三子年十月其百位之加經八
元三石名

辛號月日不知詳入任氏年人西祖

實元文十戌年十月其百位之加經八

延喜三年二月廿日

延喜四年三月 日誌目

秋田年人西幸信憑从

中舎

沖津須酒井藤原氏 吉右 秋田年人西幸信憑从

寛元九年十月廿六日十七と之間者也

上乃勢形也元々七葉全盛と揚子

延喜四年十月廿三日中人氏

日奉三月廿六日布衣也と云々也

延喜四年三月廿六日布衣也と云々也

凡公名

天和元年三月九日沖津手

元和二年八月廿日重房の息方百石
凡ふ三百石

貞享二年八月七日松平修徳元

重信記不重別金庫より夫より

若果此六千石を換ふて是より

石代俵と為り沙眼甚合二俵

合庫より夫て千石を換ふて是より

元禄二年二月九日沼屋町奉状

日事九月三日湯原時辰三時成次

揚

元禄二年三月廿八日高田より

好得一箱者之執

元禄四年十月九日群島合到付

元禄七年七月十日致仕宗和と云

主神三宮俵之揚

宝永七年二月十七日死

善悪二千年二月七日

大善組の佐橋中兵衛の吉原の男

御小姓組酒井忠兵衛守組 三善佐橋中兵衛佳明

明暦二年三月五日麻呂三善佐橋中兵衛

寛文九年十月廿七日とせの間に由

とくの勢をきこくと三善佐橋中兵衛

貞享年中移入彦根藩守組

元禄二年三月十九日死す三善

佳明の嗣子三善中兵衛守組

三善佐橋中兵衛

あきくして善念を^増進^す候^事
貞享二五年二月七日忠順端西願
吉見願禱祈^候様^に御^座候^事善念^に候^事
御^座候^事御^座候^事御^座候^事
御^座候^事御^座候^事御^座候^事

貞享二七年八月十二日御座候

日辛三月十日布衣志と^九百^七十^七

貞享二九年九月十八日御座候

貞享四年二月廿七日御座候

九千百名

日辛三月十日叙爵^候御^座候^事

元禄六年四月十日御座候^事
命^を御^座候^事御^座候^事御^座候^事

日辛二月十三日御座候^事
御^座候^事御^座候^事御^座候^事

日辛六月十二日御座候^事

元禄六年二月廿五日御座候^事
御^座候^事御^座候^事御^座候^事

元禄六年九月十二日御座候^事
御^座候^事御^座候^事御^座候^事

日辛十月

御^座候^事御^座候^事御^座候^事

元禄七年四月七日御座候^事

るきとて御加恩あり元二万石

曰年二月廿五日御加恩あり元二万石

とて御加恩あり

曰年四月廿九日青山にて別荘乃

地と給ふ

元禄八年三月廿八日四ツ谷御用

御用地六丁の惣奉給と命せしむ

四月廿五日御用と命せしむ

十と給ふ

曰年八月廿一日大蔵殿に侍て給ふ

とて御加恩あり

曰年十月十九日中野御用と建させ

らとて御奉給と命せしむ

元禄八年三月廿五日御加恩あり

御用と給ふ

惣先御用と命せしむ

元禄八年

元禄九年三月廿五日中野御用乃

御用と給ふ

給ふ

曰年三月廿五日御加恩あり

とて御加恩あり

元禄九年三月廿五日少老の御加恩あり

らとて御加恩あり元二万石

日辛卯月廿神田橋の内松平澤憲の
邸より

日辛卯月廿三日辰巳の平三郎氏
路

元禄十五年二月十八日三條山の宮に
修築する奉納と合書あり

日辛卯月十九日日光に詣りて
法用と合書あり

日辛卯月廿一日日光の公孫法親王
城山宮の法殿にて修築し法用
昌平王法用と修光寺常行僧
法死胎と修光

日辛三月廿一日大蔵殿に詣りて修
し祀神修光の修不修す

日辛七月朔日東叡山根本中堂
造りし法用と合書あり

日辛八月十八日三條山の坊舎を造
りし法用と合書あり

元禄十五年三月廿三日赤坂川に
修築する奉納と合書あり

日辛四月廿三日横渡川の修補あり
且京大坂依んて京東山本海ありを
巡視する修光と合書あり

日辛五月廿七日赤坂川に修築する
奉納と合書あり

元禄元年八月十日
九月十日

元禄七年六月

元禄七年七月

元禄七年八月

元禄七年九月

元禄七年十月

元禄七年十一月

元禄七年十二月

元禄七年正月

明曆元年三月十三日

正徳二年

甲斐守種吉

正徳二年三月十三日

天和二年四月十七日

明曆元年六月廿日

水野元福吉勝惣所

筆 小菅信

河津世祖酒井元福守祖 吉勝 水野元福勝女

延宝八申年八月廿日死

百治二亥年七月十日

寛永十八年 月 日 晴

宇治藩 傳忠 忍 氏
小 峯 信 氏

河津庄頭 公 爲 去 部 公 浦 組 公 喜 右 公 右 常 乃 衛 周

元禄二年 八月 十日 死 于 家 中

百治二亥年七月十日

太常寺以中根月向守平勝三男

御出性組公玉去部少輔組 三音信中根治理二和

寛元元年五月十日唐来三音信也

治

寛元十廿年拜入臨川長門守組

延元六年三月廿九日 御出性組并津

月信守三音信并物表

万治二年七月十日

赤松氏祖公孫孫部補遺

赤松氏祖公孫孫部補遺
三原 七五 基 勸 利 勝
後 五 子 名

寛文元年三月十二日原系三原係と稱し
寛文十二年 月 日跡目五子名是也
三原係也一奉り専忠に傳り利重(三原名
と分らるる所の事想は原利陽(三原名と
分り
天和二年三月廿二日一二月廿日本多
頼宗(利長)に對して原和(三原名)

一、如く波うけを列横に候へり
 五條とすつと作す日月未日沙眼
 其令と候は日以後未用と替へ
 作す日四月未日候へ候へり
 天和三亥年八月日梅別河別の川ゆ
 の防堤修築の奉行と人等も候へり
 福をきりくに候へり

天和三亥年九月未日死申三亥年

万治三亥年七月十日

沖小姓組 土屋三郎 沖小姓組 三亥年 宮崎平右衛門 重清

沖小姓組 宮崎平右衛門 重清

後三亥年 改七亥年

寛文元亥年三月十日 寛文三亥年
 寛文八申年二月朔日 二番所の部
 候へり
 寛文九申年十月十日 七とせう
 同右
 延宝八申年九月七日 解月
 三亥年 奉り守係八命 重清

とむ川

延宝八甲午三月六日諸國巡撫使と奉
きまじ明の甲午四月廿日東衛及と
巡りしと作と奉り三月朔日浦羅美令
好河腹二股城と給り四月三日迄と
七月九日泊り八月十日洋泊り

天和元年三月九日津佐氏

曰年三月五日南を志と奉りし
天和二年六月五日並河郡惣六百石
上野國邑樂郡高川村曰國山田郡
仲の郷村下野國女宿郡佐野庄赤見
八門村志原村と奉り凡二あり石

曰年四月朔日亡父の二回を奉りし
形と奉りし三月朔日申別屋中
女表倉寺と奉りし
曰年九月十日新恩の法書下
と奉りし

貞享元年三月五日清月寺

貞享二年三月廿七日七文七回を奉りし
女表倉寺と奉りし三月
廿九日之四月朔日泊り

貞享三年九月五日并河郡大島の
上を奉りし兩河宮の横を奉りし
好河腹と奉りし黄令に好河腹と

揚子世次品部陸河等々もに
云々云々九日陸河等々もに
揚子世次品部陸河等々もに
云々云々九日陸河等々もに

中次

元禄元年九月九日相國陸河等々
四年九月十三日陸河等々の出陣等々
柳沢出陣等々保内等々
四年三月 日西奉公等々
元禄五年九月十八日元禄等々

百治二年七月十日

新出書信以天野信房等々

御世組公家等部等々
音依天野金十郎等々

後等々

音依元禄元年三月十日音依等々
揚子

延宝六年 月 日音依等々

音依等々

元禄年中 禱入一柳出陣等々

元禄十六年三月十日致仕

享保六年三月十日死等々

万治二年七月十日

御小姓御出立兵部少輔御出立 三原大橋源三郎親宗

右御出立の御意に依りて親重御出立

後公名 後公名

寛文元五年十二月十二日原米三原
と御出立

寛文六年七月十日同日原米三原

と御出立の御意に依りて親重御出立

寛文六年七月十日同日原米三原

寛文六年七月十日同日原米三原

と御出立の御意に依りて親重御出立

寛文九年十月廿九日死

万治二三年七月十日

沖水性祖太左衛門少輔祖 三官儀 新見彦左衛門少輔

後裔子右 改重彦右

寛文元五年三月三日唐末三官儀子孫

寛文十戌年七月九日曾右衛門右近衛

三官儀子孫

元禄三年四月廿三日移入仙石因幡守祖

元禄九年三月七日致仕

宝永四年十月十二日死年八歳

万治二壬午年七月十日

御世祖古志三系系補組

大津番組以口系西吉留惣所

三系係 山本又七而改貞

後三系五甲

改三系五甲
旧三系

寛文元壬午年三月三日原系三系係と
得

寛文元壬午年三月十日兄八系在馬川清

系一の如く父の嗣子と成り

寛文元壬午年 月 日 曾三系五甲

是との三系係の如く一と成り

元禄年中 禱入北條安房守組

元禄二年七月三日藤原三右衛門
有りと宗元日記に於て或る
の國より云々

宝永三年七月七日致仕

西徳三年八月朔日死年九歳

万治二年七月十一日

大徳二年四月廿五日在任中或古也

御小姓組上屋敷御捕頭 三右衛門藤原公成

寛文元年三月廿五日藤原三右衛門

寛文二年六月八日任 藤原三右衛門

天和三年三月廿五日任 藤原三右衛門

百三十三代 藤原三右衛門 藤原三右衛門

物類之次第と云々 者以時古藤原一人

以書院若一人少一人一人御國後一人

一人西行一人一人出書院一人一人

發せしめし事以の形を以て
せしめて善く流刑を以てせしめし
し時以て是れ成政を以てしめし
を以てしめし

元禄三年八月 日 於 公 府 死

古 年 案

成政の嗣子若菜の春吉曾孫
西庵父の志流の志流の時
秋後山崎勤の由も古人とも
許けぬ二人は甲子と後小
元禄の百二年六月十日由頼を
流せぬされ成春の流に松野の

中子と許る之富松通と路光醫
業を以て七年り清吉の孫若菜
陽政のり家長忠信侯侯の若菜
とありし通并家ははしし年々

寛文二年十一月十九日

御中世組公儀之御事補組 言儀 松平主水云方

改書在儀

松平丹後守重直四男
世傳國建目部梓能成之松平重直英親才

寛文元年三月五日自唐来之言儀之儀

延宝二年十月三日御中世組云方

同日御中世組之言儀之儀云方云方

料云方儀之儀

同年三月五日自唐来之言儀之儀

天和二年四月五日自唐来之言儀之儀

云方云方

元禄四年八月十日 沖光抱紙

元禄五年七月三日 廣業古印依

と糸代し成り終り 任直書巻力内

よしとす

元禄十三年八月七日 元亨九策

寛文三年十月十九日

沖書院書紙段十右馬内信隆書子

沖書院古紙云部少輔但 宣之 加く凡次高命信全

後子石

改改書巻

寛文四年 月 日 既目子石

延宝二年 二月六日 屋敷段と兼

つぎ 伊内子

延宝四年 二月三日 屋敷段と兼

天和二年 六月廿日 柳由緒と兼

政邦の屋敷 柳後村と 同書目子と

兼つぎの伊内子 屋敷同書目子

寛文五年二月十日歸りて
相尋寸

元禄元年八月廿三日涉中佐組を既

同年十二月廿日布衣志と免され

宝永元年十月廿八日涉中佐既

而後四年十二月十九日将多女

同年三月六日死す年未

寛文三年七月十九日

涉中佐組向井部三官兼

涉中佐組公室主部少輔組 三官兼 向井部三官

後將監

寛文五年三月廿日布衣志と免
福

寛文七年六月廿日布衣志と免

見習中佐免

延宝二年九月廿日布衣志と免

との三官兼八返一奉

同年十二月廿日布衣志と免

元禄二年辛丑九月廿九日拜参合子列寸
元禄六年辛丑二月十八日致仕
宝永二年辛丑二月廿日死

寛文三年辛丑九月廿九日

御小姓組七屋系部補組

大由表組改任 未在帝 不信熱風

三景儀依之 未在帝 御心相

後七名

後三帝

寛文元年辛丑二月廿七日帝 御末三景儀と云

延宝二年辛丑二月廿日 御末七名と云の

三景儀と云一と云

天和二年辛丑二月廿日 御中人氏

日辛丑二月廿七日 御末七と云と云

元禄二年辛丑七月廿日 御末二景儀首

と云此と云一と云 下総國豊岡郡

少々なり

元禄十二年八月十七日死す十八歳

寛文二年辛丑月十九日

所書院表青山丹波守組三郎重貞貞利重成

御小姓組古伝云初小僧組 三郎重小僧系以家而和信

後七百石 後伊豆守

寛文二年辛丑月十九日青原宗三郎依と

御也

延宝二宮辛丑月三日家督七百石

是までの三郎依と一書る

元禄辛申中群入彦坂寺改年組

元禄十二年辛丑丹波守組三郎重小僧系以家而和信

此より法用ありよ〜〜〜

埼玉郡中書村常泉村にてその乃
仲とて候

元禄十三己未二月廿日死七年

寛文三年三月九日

御書院者之校陽及守但平命之成惠候

御書院者之校陽及守但平命之成惠候

後名

寛文三年三月廿日書院者之成惠候

福

延宝三年七月二日臨終之石是也

三書院運一書院之成惠候

分門

自寛文三年九月廿日出羽國山形候
引渡所用之令也

美奈延上陽ノ三月五日御て相得寸

元禄元年二月十三日臣等改と兼

治と作と兼

元禄元年三月十三日死

嗣子平助久敬七月十日明の建徳公

上陽ノ中平九年敏樹二宮名と兼

以親王久敬と稱六月八年八月日八歳

少く失り九八歳絶九八歳在成

所ノ終

寛文三年三月十九日

津重虎者内及若孫也但其在所重次忠从

津小性組右衛門少輔但三原河村権母重朝

改臣馬

寛文三年三月十日唐米三原係と

備也

元禄十六年八月十九日死

寛文三年十一月九日

赤井性理公を以て御禮に云々 石野仙傳馬房書

此書信本多能信也忠告馬房延趣凡

寛文三年十一月五日自傳云々 徳

寛文九年四月五日父廣延を以て
松林一轉外重六を以て以て
中華を以て云々

元禄二年十一月六日相之間書
元禄三年十一月十日書云々

元禄七年六月七日禱入部
丹波守但

享保七年八月廿日死七十八歳

寛文六年三月三日

慶安二年十月三日父初来本知下

新見浦守三信養子
忠久

浦小信但云屋之部か浦但 音字若新見七右衛門信義

信義之父三信より先慶安二年十月三日

長松若上属より新見之子名と云

時信義は是より取来り音字若名と

稱し幕府の時家人より心作と

名と

寛文十二年三月十日御代

日向加恩三右衛門上野國邑栗部洲井村

少くは下凡九百字あり

曰年三月廿八日布衣之とあり

延宝八申年二月七日宇治藩より

陸奥と命とあり三月廿九日陸奥

英全坂河原とあり三月廿九日

沖中陸奥とあり三月廿九日

天和二年四月廿一日並陸奥より

上野國邑布部下中野村篠原村より

なり凡九百字あり

貞享二年四月廿一日死

寛文六年十一月二日

寛文四年七月高直

御代組公家系

幼帝

中山

忠臣

寛文三年

寛文六年

三月

三月

三月

三月

元禄十五年辛丑月日辞入松平と申渡

宝永三年寅月十日西條より来て

さきくの例に依りて取柄の事と

併くもろくも作らざる

宝永三年二月相見御馬の事と

よりしに依りて多分合列す

口辛三月九日法如忌に依りて

原宗と宗統より来る武列情む

情羅那の内よりくるは九音石

宝永七年辛酉八月十日死

寛文七年辛丑月廿一日

御将領に近き御馬の用情に

御中世組に公に御痛組 三音係 近藤造酒御用貞

政治を馬

寛文九年辛丑月廿一日原宗三音係と

編

元禄九年辛巳四月廿三日元方御酒大氏

口辛三月廿一日布衣と云ふ事

口辛四月廿一日法如忌三音係九音係

元禄十五年辛丑六月廿二日

八重姫若水館へ法如入乃法用と

金部

日年七月三日唐来の書信と書状
如し終り上徳國より来る書

元禄三年六月十二日

八重原若冲入書りて

日年日月廿日廿夜の書用を替

とく河原を揚

元禄三年三月朔日沖光りて

宝永三年三月廿日西原入書りて

宝永三年 月日沖光りて書りて

作り

西徳公事年二月二日元元書りて

寛文七年十一月五日

涉路花子四條三條圓方想

沖光組公事部抄補遺

三條田守之書りて

後公事

後田守書

寛文九年十一月廿日唐来の書信と

揚

延宝二年八月廿日唐来の書信と

未し猪籠と云ふ事あり

貞享二年七月廿日唐来の書信と

この二書信より

貞享二年十月十日

父 涉路花子

同日父附のそく、多縁に同心、千磨、但
仁と頼り

同辛未月廿八日、白布長とをきり

元禄三年七月廿三日、武列、多摩郡

吉原乃三子、村、狼、あ、い、を、狼、と

活、能、あ、く、あ、つ、を、作、り、く、目、す、に

活、能、あ、く、あ、つ、を、作、り、く、目、す、に

乃、救、う、に、帰、る。

日辛未月廿七日、又、日、あ、ま、て、狼、は、ま、ら、

お、た、り、し、作、り、九、日、ま、ま、と、活、能、あ、く、

狼、と、お、あ、ま、ま、日、も、帰、る。

日辛未月廿七日、武列、机、原、狼、子、

あ、ま、ま、作、り、て、明、の、古、く、ま、ま、と、

活、能、あ、く、あ、つ、を、作、り、く、目、す、に

帰、る。

元禄三年四月七日、徳園、佐、倉、野、

狼、お、野、駒、と、喰、ひ、し、お、た、り、し、作、

り、九、日、之、活、能、あ、く、あ、つ、を、作、り、

く、目、す、に、

元禄三年四月廿日、活、能、あ、く、あ、つ、を、作、り、

日辛未月廿三日、武列、北、見、原、

あ、ま、ま、作、り、て、明、の、古、く、ま、ま、と、

活、能、あ、く、あ、つ、を、作、り、く、目、す、に

元禄三年三月廿五日、猪、籠、

作所にて日其のまじり松橋
池袋村場乃内村小日向の田圃に
長崎村常鴨西ヶ原上松橋のまじり
日こゝに猪のまじり
此鹿に仇坊とと獲る。

元禄七年三月廿九日
警のかかり及して作所にて
つりまじり常鴨のまじり
あり

元禄八年四月十日
猪鹿と追つて
つりまじり常鴨松橋とまじりに

猪鹿つりまじり

元禄十五年四月十八日
追つて巡つて猪鹿とまじり作
あり四月廿九日追つて巡つ

大猪野小猪土麻とまじり

元禄十五年二月廿九日
法用つりて晦日まじり猪野と打
元禄三月廿九日

元禄十五年八月十二日
法用具法用廻つて命をまじり
法用とまじり

元禄十四年三月八日
法用とまじり

おぼろげに傳へたる事ありしに
つねに九月のころに
元禄十五年二月十日又伝
はるるし海よりいふも
之の頃

宝永三年九月九日死す

寛文七年五月廿日

御小姓組土屋五郎左衛門尉
三右衛門 官後 御助 兼 中

御同手 高橋 助 兼 中

後 官 石

寛文九年五月廿日 高橋 三右衛門
傳

元禄四年七月廿日 高橋 三右衛門

この三右衛門は

元禄十五年八月 高橋 三右衛門

宗地より 高橋 三右衛門 田村 新田村

少く

宝永二酉年四月廿日 祥入松平主中隊組
西徳四年年七月八日死七十五歳

寛文七年年二月廿日

老女去膳乃養子

河津組云屋去部お備組 音保 大膳 三屋 義元

致次書入

義元實 幕中 藩中 幕中 豊田

て去膳かゝ乃いりておりて去りて

五とに去りておりて去りて

列考

寛文九年年三月廿日 西徳三年

編

西徳元年年二月九日死

寛文七年十月廿日

御書院若仙石因情与祖古右馬忠政忠政

御水性祖古右馬忠政

三原大右衛門内忠頼

後高公右余 改刻

寛文九年十二月廿日唐羊三右依と

錫也

延宝七年 月 日 福月古右余

是より云右依也

元禄七年七月廿日死四十七

寛文九年 三月 三日

寛文七年 三月 十日 御旨 吉原

日根野長重 吉原惣代

河津組 河津村 惣代

吉原 日根野長重 惣代

延宝八年 三月 三日 御旨

天和二年 三月 廿六日 御旨 吉原惣代
上野國山田郡市橋村中津村 惣代

延宝七年 三月 七日 御旨 吉原惣代

天和二年 三月 廿六日 御旨 吉原惣代

天和二年 三月 廿六日 御旨 吉原惣代

天和二年 三月 廿六日 御旨 吉原惣代

天和二年 三月 廿六日 御旨 吉原惣代

天和二年 三月 廿六日 御旨 吉原惣代

延宝七
元和三年十月九日
元禄二年十月九日

寛文十一年九月十三日

寛文七年 月 日 社 名

柳系平十郎 脇政 治男
共合

柳系平十郎 脇政 治男

政喬の父 脇政 源伯 之 攝 別 姓 跡 子
在 于 此 一 后 柳 系 刑 部 左 輔 政 房 之
孫 子 有 之 寛 文 七 年 兄 之 同 一
家 名 柳 系 平 十 郎 治 男 之 孫 也

延宝七年二月廿日 柳書院 菅組 院

同日 柳加恩 之 旨 儀 凡 以 旨 儀

同 年 十 月 廿 日 有 旨 儀 之 旨 儀 也

延宝八申年四月廿九日自陸城乃警
清日高北河原白根好之儀
天和元百奉 月 日 為之澤湯
自津細宮之故

天和二年四月廿百並清如恩之百石
九之三石

貞享四年三月九日沖光院
元禄四年七月廿三日死

寛文十一年九月十三日

万治二年三月廿三日曾千石 日根野中助之真也
元禄二年三月廿三日曾千石 小笠原

津波組高野守組 吉名 日根野中助之明
改六石

元禄四年三月廿六日死之七石

寛元二十五年九月十三日

寛元二十五年十月廿日家督

桂左衛門重義三男方智原

少将隆通右左衛門右兵衛

河小性祖堀田對馬守組 七右衛門 今重元 隆重 隆徳

自寛元二十五年八月廿日死甲子三歳

寛文十二年七月廿六日

寛文十二年七月廿七日分知

御中仕組荒川出陣守組

松平重直と藤義四郎

名合

若松平長雨膳亮

改佐重直

御中

元禄十四年四月廿七日解入松平重直守組

享保二年八月二日死去公家

寛文十二年四月廿六日

佛書院者以永井村為寺由區當り

佛小性組荒川出野守組

三原永井之稅由乃

後五名

延宝二萬年三月十八日原系三音係之場

延宝二卯年三月十八日分知五音名是との

三音係の一奉り

元禄三年四月十八日相之同書表

曰年七月三日由書信入之是之係

三音係組入

元禄四年四月十八日三組佛小性組

青山信成守祖中入

寛文十二年六月廿六日

赤小姓祖荒川出羽守祖

大由善祖治兵衛義量忠辰

三右衛門井傳左衛門義勝

後五右衛門

改三右衛門
治兵衛

延宝二酉年三月十日唐米三右衛門忠辰

貞享二酉年 月 日 全物表

貞享三酉年 月 日 西月九百二十石

是迄の三右衛門一奉る

元禄六年六月十八日唐米改三右衛門
作所

元禄八年六月廿六日唐米改三右衛門

何事とて其令に時辰二時と爲る
元禄九年三月廿六日一書あり
其令に時辰二時と爲る

元禄十一年四月十八日沙院院

日年十二月 日布衣志と云ふ事

元禄十三年七月唐来五書集と云

子取し終り上野の国なりと云ふ

宝永二年四月廿日沙院院

宝永六年七月朔日沙院院

享保七年四月廿日沙院院

享保十七年三月廿日白鳥の火

又して身袋のうちの郵封あり

寶永元年二月八日免八十九歳

寛文十二年五月廿一日

中津藩内出陣守備

三浦大草吉清利忠

延宝三年五月廿一日

楊子

延宝六年五月廿一日

那至

死二字

延宝四年四月十日

延宝二年三月十日

伊豆守組

三交音早
一石六斗余

加茂權

加茂權
改平内

平内泰五養子

多合

元禄四年三月九日

日年八月三日

元禄五年三月八日

丹波守組

延宝四辰年四月廿六日

寛文七年七月廿日

赤小性組荒川出陣身組

加々美文治守常

改修七帝
全右衛門

元禄十三年六月廿日死守田家

全右衛門西吉養子

出陣身組

延宝六年三月廿九日

中根日向守正勝三郎
小菅信太左保出陣守組
三信 中根修理正和

宝永七年辛酉月某日死

延宝六年三月廿九日

御儀奉行新在鳥改重惣風

御小姓組若原周防守組 三景儀大井中而政長

後多石

改重十而
新在鳥

延宝八申年三月廿六日 宿米三景儀と協
元禄上宮年九月十八日 若原周防守と
合をさし

元禄廿三年四月廿一日 統一統し若原傷
涉目多と知され

宝永元申年 月 日 泉智子石
そとの二面儀とかし奉る

同平十月有新政改

宝永七箇年四月廿六日新政改之免之

宝永七箇年四月朔日先施既

同平三月十八日有新政改之免之

享保十六箇年八月十六日死七十七歳

延宝六年三月廿九日

于代此若休而老六箇年(高)委活也

所小性組并津岡防身組之公名 本回借十而委也

改(高) 告(高)

同平三月廿六日(中)之(高)并(高)之(高)

之(高)之(高)父(高)送(高)于(高)之(高)之(高)

元禄十五年三月廿七日死年三十二歳

延宝六年三月廿九日

御出陣系津周防守組

御先陣取勘解由忠守御所

三音依中山助六忠守所

後三音依 後改勘解由

延宝八年三月廿七日御所系津三音依上揚

貞享元年三月廿七日御所系津三音依上揚

貞享元年三月廿七日御所系津三音依上揚

貞享元年三月廿七日御所系津三音依上揚

貞享元年三月廿七日御所系津三音依上揚

貞享元年三月廿七日御所系津三音依上揚

元禄二年七月七日御所系津三音依上揚

津用をよりしを好しきと云
幸祈りしりらる。

元禄の酉年六月十日津使番

日辛十月十七日日光寺目守代り
命とくま

日辛十二月十八日布衣とくま

元禄八月辛六月九日日光寺目守代り
命とくま七月廿日津服美令と
福の明の子辛二月十日日光寺
元禄十五年七月十七日日光寺目守代り
命とくま

元禄十五年七月十五日日光寺目守代り

那津原村と徳園寺村那成寺村
七右衛門の慶津園成とて執り
まわりしと徳園寺那成村
長長村新長長村高萩村新
市橋村とて延高共八百半辛酉年
ニシと云らる。

元禄十五年九月十日一統乃津敷
とて白根と云らる。

日辛三月二日日光寺目守代り
命とくま明の辰辛四月廿日津服
美令と福の九月廿日日光寺
元禄十五年十月二日水三合門

光國師在隱西山の館中て亦嘗て其
法便して書するの作者とて其令
二と揚つ日月廿四日て浮揚に

元禄十六年二月三日在隱國下館
殿に後法用と命書とて日月廿八日

法眼其令二と揚つ二月廿八日て
浮揚に

宝永元年八月十日法眼殿

宝永二年四月廿九日死す

延宝六年二月廿九日

曾我伊賀守包助六男

右馬頭徳信師在老曾我在馬頭真才

河津庄組兼藤原守組 三後曾我源三郎助勝

改元五八而

助勝父伊賀守包助之曾司成乃

始君とむひは系りし時寛文元年

七月十日六男源三郎助勝と百助とて

作らて其年八月十三日九弟とて

浮揚し其後兄と許は其の

二十三歳にありしうも其時諸藩入

り有ぬとて百助とて河津庄組

列せしむる所あり

延宝八申年三月廿六日唐采三言儀と

儀

天和之亥年四月廿五日桐之園法要

日年四月廿二日法書院及稻葉出題と入

延宝六年三月廿九日

唐采三言儀の唐采

清心性組唐采周防等組 干儀 土屋九門首直

改 干儀

延宝七年三月廿一日いすの唐采と

儀とさるる一内父の遠縁の同唐采

干儀とさるる一内父と

延宝八申年八月晦日中唐采

唐采の申年二月廿二日清心性組

唐采と改

元禄申年七月二日中唐采

元禄十五年七月十八日法廷改

日日月名表と改む

日年三月十八日布衣と改む

元禄十五年二月四日野田藩内

勘多地中河川沿川の部と改む

是より方お前の部ハ改む

元禄十五年七月三日唐系と改む

宗地不承と改む中毛國郡聖郡と改む

村下河村右馬村は國芳郡聖郡と改む

下多國郡村は國持郡聖郡と改む

警備村は國河郡根室村は國郡

郡忍田村の字にてあると改む

元禄十五年七月廿日未辰年

夏日老少あり

大猷廟を南河志布達寺の因彼法と

名て聖徳と改むし作有るは乃

辰年三月廿日法服附殿と改む

禰は四月廿日と改む日日光子

着は廿日の夕と改むと改む

聖徳は七月法法余の日聖徳

廿日法法余の夕も聖徳と改む

廿三日日光と改むは廿日

廿七日法服し作と改む

元禄十五年三月廿日法法余

享保八年六月十八日新治藩に二名石
の替の因ふり

享保九年七月十日水戸藩に分質
の組之御書と令をり

享保十三年二月十日水戸藩に同敷
の御書と令をり

享保十三年二月十日水戸藩に
御書と令をり

日永三月十日水戸藩の御書
及書目すき令をり

享保十六年八月七日水戸藩に
列す

享保十七年八月十日水戸藩に
御書

日永十二月十日水戸藩に

延宝六年三月廿九日

大番若組長忠兵衛重忠

御小姓組若原周防守組 三原 本間平左衛門光

後七右衛門 後忠兵衛

延宝八年三月廿一日原米三右衛門

揚子

左様を存年七月二十日浦上吉右衛門

通好へ三右衛門より是等の三右衛門と

かへし

元禄四年八月十日相向書

同年月十九日山崎重信より入りし因書

上野外組
元禄六申年三月十八日
志摩守組

延宝六年二月九日

志摩守組
元禄六申年三月十八日
志摩守組

延宝八年三月廿一日
志摩守組

延宝六年二月廿九日

御書院勲章奉勅命了但亦九而信德院
御書院勲章奉勅命了但亦九而信德院
御書院勲章奉勅命了但亦九而信德院

延宝八年二月廿五日
御書院勲章奉勅命了但亦九而信德院

貞享四年二月廿八日
御書院勲章奉勅命了但亦九而信德院

延宝六年三月廿九日

御出仕但并津園防舟組

津書院甚秘東山御舟組九門和義忠臣

三原依土屋平十郎和治

後土原石

後石門
忠義

延宝八年三月廿日唐原三原依之儀
天和三年七月廿日唐原三原依之儀
三原依之儀

元禄十五年三月廿日野村守教家儀
引渡法用之令也
元禄十五年三月廿日野村守教家儀
元禄十五年三月廿日野村守教家儀
元禄十五年三月廿日野村守教家儀

改とあるは作行

日年三月某日某役の事と号し

治し美令は内服ニ似成と号し

元禄十二年三月某日又号し

美令は内服ニと号し

元禄十二年三月某日元方酒造

日年三月某日布衣者と号し

正徳二年三月廿日元方酒造

延宝六年三月九日

所書院者萬葉和曲而志福也凡

亦小性組若澤周防組 三原松平初平而志和

改長帝

延宝八年三月廿六日原米三原信と

福

貞享三年三月廿日 釋入彦坂志福也組

貞享四年三月九日 輝月多吉若と

福は是と乃三原信八之(奉)

中入給を多助と久八口三原信と分川

元禄十二年八月廿日原米三原信

りしと定地成りしに在りて
之に在りて一言村同國之任地落幡村
下野國芳賀郡古和留村上大角村
兼野川村にて死す
室永七喜年二月二日死

延宝六年二月廿九日

清小性組并津周防守組 三原金森平存造

沙書院書荒川出船年過り力頼明想所

延宝八申年三月廿六日 原米三原儀と
備

貞享二丑年春父公頼明之強賊の警備
のしよるをよるをよるをよるを
おろししをよるをよるをよるを
死罪に處せしむる

貞享二丑年二月十日 部 備死

天和元年二月廿一日

實是元年 月 日 濟

之白影傳門由道悲

小普信

中山性祖在深周防守祖三後之田金高由貞

改新高

西德元年八月十日死守古案

子主馬を次と号し嗣を

元禄三年年四月廿日死二十歳

重房の嗣子とす重次南宗の

ことり子れきし七月父を遠流す

六百二十由石家と流しに元禄八

年六月廿日六親おとせと早

しり八をより嗣をて家絶て

子六百二十石と号し重次南宗の

ことり子れきし七月父を遠流す

六百二十由石家と流しに元禄八

年六月廿日六親おとせと早

しり八をより嗣をて家絶て

重とて國勝を重とて重次南宗の
ことり子れきし七月父を遠流す
六百二十由石家と流しに元禄八
年六月廿日六親おとせと早
しり八をより嗣をて家絶て

天和三年九月廿四日

新清善院神尾市江尾元清守

亦小性祖花田又云尾祖 三原神尾伊尾元继

日辛酉年三月依上端

元保元年十月廿日死云云

元继嗣子云云八家絶云云

天和三年九月廿一日

中世組苗又高組

三原佐野高任集

御書院番稱集出相守道又高政忠

日辛高末三高任集

任分死

天和三年九月廿一日

佛性祖茶圃又云佛性 三原酒依権右衛門守

後三年之石

口年唐系之百信と云々

貞享三年七月廿九日海月廿三石

是年の三月後六つと云々

元禄三年六月晦日佛性奉行

元禄四年九月廿一日佛性納戸

元禄五年六月廿三日左陸奥列の

宗地年毎小石務少多々此列の

ゆゑに康平六年二月の依りかへ給り
りしに或列言蟹部馬引治村に千
石六去一五十八年曾祖父長壽
曾祖小孫して實承三年の御承平
地をさへえりしに治りし事と
しに治りし小孫を治りし事と
小六子の孫の治りし事と
思ふの願ふ事と
して治りし事と
との治りし事と
おはせ給る事と

元祿八年三月廿一日入太極宮

享保元年三月廿一日死

